

— OAPと —
帝国ホテル大阪

大阪の銅の故郷で 出会った銅の「職文化」



かつて旧三菱金属(株)の大阪製錬所があり、銅の電解、加工が盛んに行われていた大阪市北区天満橋は大阪における「銅の故郷」と呼べる地だ。この製錬所跡地に開発されたOAP(大阪アメニティパーク)にある帝国ホテル大阪で、昨年、帝国ホテル開業120周年記念展示が催された。そのロビーに飾られていたのは、“古い銅鍋(あかなべ)”。

お酢で洗い、塩で磨き込まれた銅鍋は、いまでもその輝きを失わない

五百個あまりの銅鍋を密かに疎開!

太平洋戦争が激化した二九四二年、武器弾薬の製造に金属を徴収する「特別金属回収運動」が始まる。その時、約五百個の銅鍋が糖業会館の地下へこっそりと運び込まれた。以前、帝国ホテル第十二代料理長を勤められた故・村上信夫氏にインタビューした際「ダメな鍋だけ供出し、大切な銅鍋は孤に包んでしまいい込み、その周りにガラクタを積んで隠しておいた」と教えていただいた。そこまでして守り抜いた銅鍋について村上氏より「銅鍋で作るとソースはより美味しくできあがる。シンチューは厚手の銅鍋で作るに限る。三時間煮込んでも銅鍋なら焦げ付かない。など、銅鍋に対する並々ならぬ信頼・愛着の深さを語っていた記憶がある。



120周年記念で展示された銅の手鍋

今回、展示会場をご案内いただいた広報の福田氏からは「戦前はなかなか先輩からレシピを教えてもらえず、洗い場で鍋に残っていたソースをなめてその味を盗んだものだ」と聞いたことがあります」とのエピソードもお伺いしました。つねに磨き込まれた銅鍋の底には、帝国ホテルのシェフのスピリッツが、いまでも受け継がれているに違いない。



帝国ホテル 大阪
総支配人室 企画課 広報
福田 奈津記氏

OAP いまも「職文化としての銅」の姿を伝える! 旧大阪製錬所跡=OAP(大阪アメニティパーク)



三菱マテリアル株式会社
執行役員
大阪支社長ノ芝 恭介氏

OAPは、三菱地所(株)と三菱マテリアル(株)の共同事業により「水と緑のアメニティ空間」をコンセプトに「職・住・憩」の機能を高次元に融合させた複合開発エリアである。旧三菱金属(株)の大阪製錬所があった場所ということもあり、銅に対する理解と愛着が深い。

三菱マテリアル(株)の大阪支社長芝氏によると「OAPでは、昔の製錬所の正門柱をいまでもエクステリアに使用しています。また、エリア内には銅アノードをサインに使用、施設内には製錬所の壁面をイメージしたモニュメントも設けています」と、職としての銅の文化を現在に残す工夫がなされている。春になると美しい桜並木に地域住人が集い、昔話にも花が咲く。この街を彩ってきた「銅の職文化」は、いまでもこの地で脈々と息づいている。



旧製錬所 正門柱をエクステリアに



銅アノードをエリア内のサインに転用